

タイトル：第2複葉展開期挿し苗育苗によるイチゴ萎黄病伝染防止法の主要品種への適用

[要約]

イチゴ萎黄病のランナー伝染を回避するためにランナー先端部が第2複葉展開期に達した時点で採苗し、挿し苗育苗する方法は、イチゴ品種の「女峰」、「さちのか」、「とちおとめ」に利用できる。

香川県農業試験場・病害虫担当

[連絡先] 087-889-1121

[部会名] 生産環境（病害虫）

[専門] 作物病害

[対象] 果菜類

[分類] 普及

[背景・ねらい]

イチゴ萎黄病の親株からの子株への伝染は、親株から出たランナー内の導管を通じて起こる。この伝染を薬剤では防止できないが、「女峰」についてランナー先端部が第2複葉期に達した時点で採苗し、挿し苗育苗することで伝染を防止することができる（四国農業の新技术，第6号,77-81. 1996）。本採苗・育苗法を利用したイチゴ萎黄病の伝染回避についてイチゴの品種別に適応性を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 親株より発生したランナー先端部が第2複葉展開期に達した時点で親株から切り離し、挿し苗育苗することで、子苗の萎黄病の発病をほぼ完全に防止できる。この伝染防止技術はイチゴ品種の「女峰」、「さちのか」、「とちおとめ」で利用可能である（表1）。
2. 特に親株に萎黄病の病徴が発現する5月初め以前の採苗では、ランナー内に病原菌は存在せず、より確実に親株からの伝染を回避できる（[表1](#)，[図1](#)）。

[成果の活用面・留意点]

1. 夏期の高温時に挿し苗育苗を行うには、ミスト灌水を行うなど発根、活着までの管理に注意を要する。
2. 萎黄病に弱い品種である「宝交早生」では、急激な病徴の進展によって、親株からランナーがほとんど発生しない。

表1 ランナー先端部子苗の第2複葉展開期における時期別、品種別の採苗による
イチゴ萎黄病菌のランナー内分離状況及び発病状況

ランナー採集 挿し苗月 (挿し苗日)	女 峰						さちのか					
	採集 ランナー 数	親株発病 ランナー 数*1	到達程度別 ランナー数*2			子株 発病 株数	採集 ランナー 数	親株発病 ランナー 数	到達程度別 ランナー数			子株 発病 株数
			I	II	III				I	II	III	
2月(10,17,24日)	13	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0
3月(2,10,21,28日)	10	0	0	0	0	0	16	0	0	0	0	0
4月(12,20日)	14	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0
5月(1日)	-*3						12	0	0	0	0	0
5月(16,30日)	27	1	5	0	0	0	31	1	1	1	0	0
6月(12,27日)	21	5	6	5	0	0	38	3	4	1	0	0
7月(27日)	4	0	0	0	0	0	5	0	1	0	0	0

ランナー採集 挿し苗月 (挿し苗日)	とちおとめ						宝交早生					
	採集 ランナー 数	親株発病 ランナー 数	到達程度別 ランナー数			子株 発病 株数	採集 ランナー 数	親株発病 ランナー 数	到達程度別 ランナー数			子株 発病 株数
			I	II	III				I	II	III	
2月(10,17,24日)	8	0	0	0	0	0	-					
3月(2,10,21,28日)	18	0	0	0	0	0	-					
4月(12,20日)	13	0	0	0	0	0	-					
5月(1日)	4	0	0	0	0	0	-					
5月(16,30日)	44	0	0	0	0	0	-					
6月(12,27日)	24	0	1	0	0	0	4	3	2	0	0	0
7月(27日)	7	0	1	0	0	0	4	2	1	0	0	0

*1: 採集したランナーの内、親株に発病を認めているランナーの数
 *2: ランナー内の病原菌到達程度別の分離ランナー数(累積値)
 I: 親株着生部~中央の切片までの分離
 II: 中央~子株着生部直前切片までの分離
 III: 子株着生部切片から分離
 *3: ランナー先端部子苗が第2複葉展開期に達しているランナーがないことを示す。
 但し、供試株数は各品種とも8株の2反復とし、無接種区では発病は全く認められなかった。

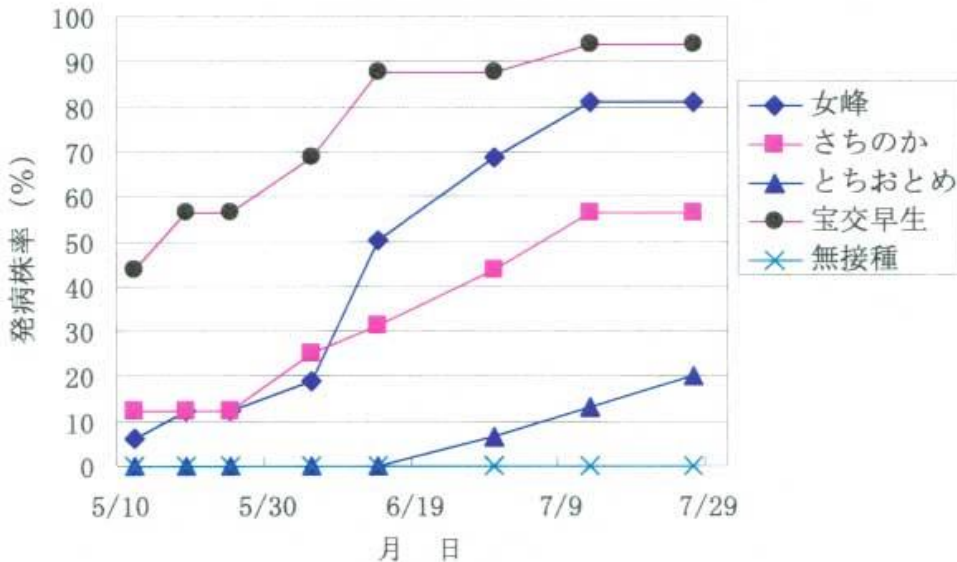


図1 イチゴ品種別の接種親株の萎黄病発病株率の推移

[その他]

研究課題名：臭化メチル代替新防除技術を核とした野菜類の持続的安定生産技術の確立

予算区分：国補（地域基幹）

研究期間：平成12年度（平成11～15年度）

研究担当者：森 充隆、十河和博、鐘江保忠

発表論文等：なし